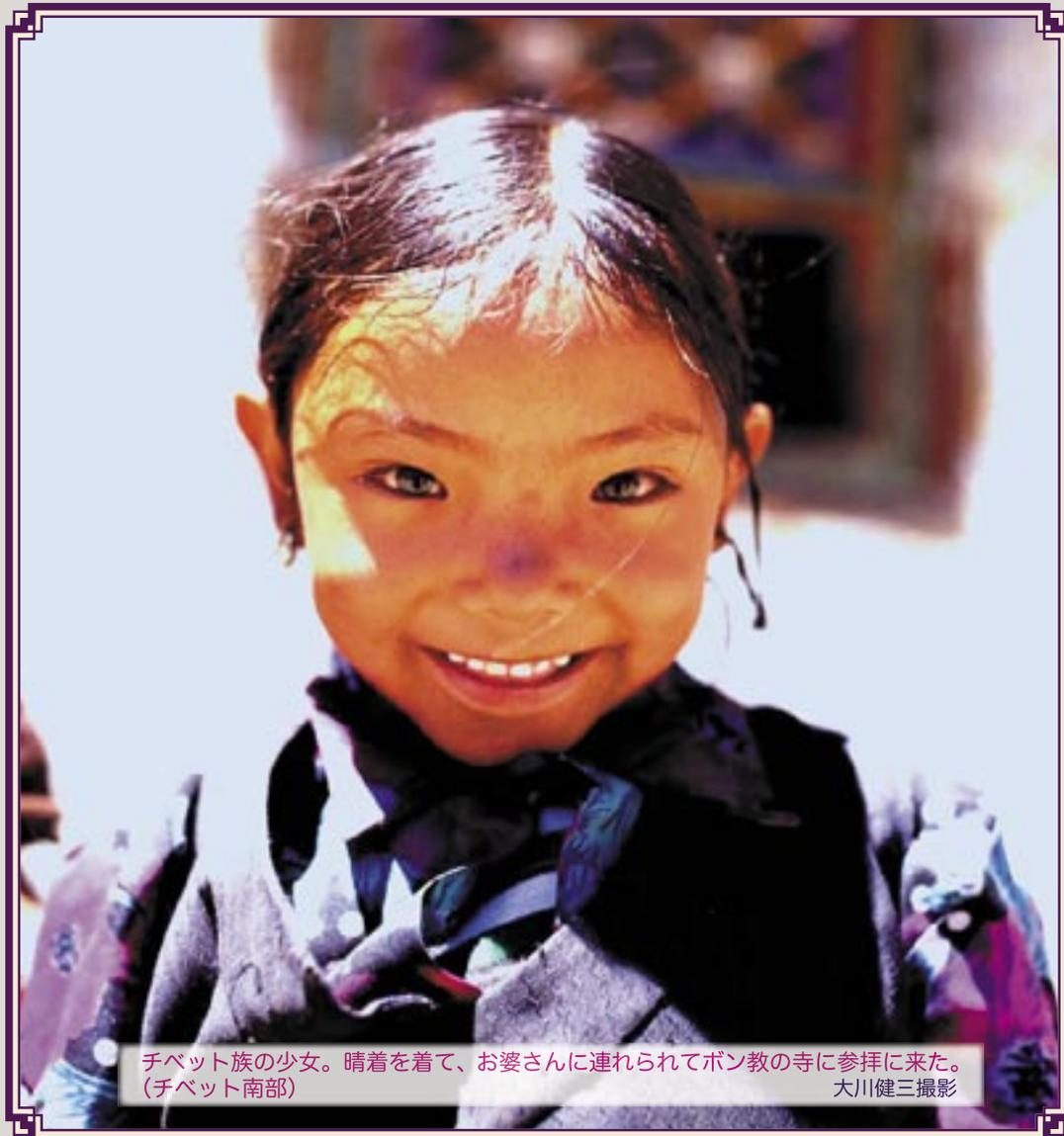




112号
2006/4/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール: wanli@m2.ocv.ne.jp
ホームページのアドレスが上記に変更になりました。



チベット族の少女。晴着を着て、お婆さんに連れられてボン教の寺に参拝に来た。
(チベット南部) 大川健三撮影

“わんりい”112号の主な目次

北京雑感その3「北京の交通事情-1」	2
媛媛来信[22]・「寒食節と綿山」	3
黄土高原来信第二部「陝北女娃娃」4小刘老师	4
小刘老师(原文)	6
中国を読む[31]【祖国とは国語】	7
私の調べた四字熟語[1]・臥薪嘗胆	7
「雲南省うどん(米線)の旅-2」	8
チベット族の聖なる山・四姑娘山3 楽しみ方2	10
アフリカとの出会い8「農村で暮らすある日」	12
ドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」上映に当たって	14
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	14
「中国語で歌おう! 会」新規発足について	15
‘わんりい’“掲示板”	16

【ちょこっとひとこと】

この冬は予想外の寒さでした。いつになったら暖くなるのかとこんなに待ち焦がれたことはなかったようです。記録的な豪雪に見舞われた地方はどんなにか大変だったことでしょう。

梅はまだ咲き残っているというのに、桜の花が開き始めました。梅が咲き、白木蓮が咲き、桃が咲き、桜が咲き、今年はこの辺りもまるで北国のように一気に豪華絢爛の春に突入です。季節が見えるところに住む幸せを改めて感じるこの頃ですが、それでも手放しで喜べない近年の異常気象で、胸が痛くなる自然災害も多く発生しています。

科学も文明もかってないほど発達した20世紀でしたが、人類の幸せはそれだけでは得られないと感じ始めました。他に何が必要なのかいよいよ真剣にそれぞれが考えるところに来ているようです。果たしてそれは何なのでしょう。(み)

10年程前まで、北京は「自転車王国」と言われていました。大通りいっぱい広がって走っている写真に、「北京の通勤風景」なんてキャプションが付いていたのを見たことがあります。私が初めて北京へ行ったのは、8年前ですが、その頃もまだ、朝夕の通勤時間帯には道幅の半分を自転車が占領して、バスやタクシーは遠慮がちに走っていました。しかし、それ以後毎年行く度に自転車は少なくなり、その分自動車が増えて来て、最近では、車の方が断然多くなりました。現在北京の自動車は、1日1000台のペースで増加しているそうです。

北京の道路は広くて快適です。環状道路は2号から5号まで既に完成していて、所々で環状6号線も既に着工しているようです。道路は広くて、ゆったりしており、東京付近との最大の違いは、走行していて圧迫感がないことです。勿論「防音壁」なんて言う無粋なものはありません。こんな快適な道路で渋滞など起こらないだろうと思うのですが、実際は、しばしば渋滞が起こっているのです。

渋滞の原因は大きく分けて3つあると思われます。第一は、運転者のマナーが問題です。中国のドライバーは、強気な人が多いようで、譲ると言うことをあまりしません。ちょっと譲り合えばスムーズに走行できると思うのに、頑として譲りません。バスの上から見ても、バスが停留所に近づいて右に寄ろうとする(中国は右側通行です)のですが、右側を並走している車はバスを先に行かせません。前方にはバス停があるのですから、前のバスが支えていると思うのですが、バス停に着く頃には前のバスがいなくなると思うのか、バスの運転手が諦めて速度を落とすのを期待しているのか、譲りません。バスはバスで、右の車を先に行かせると、その車のすぐ後の車が同じように入ってくるので、譲った甲斐が無くなります。双方我慢比べをすることになります。北京では、車の運転には、技能ばかりでなく、忍耐力と気の強さを併せ持たなければなりません。

交差点で、前方の最後尾が交差点にかかっているれば、黄信号、時には青信号でも手前で止まりますよね、ところが北京では、どんどん交差点内に入ってきます。交差する方の信号が青になっても、交差点内の車が邪魔になって進めません、左折する車があったりすると、渋滞に輪がかかります。

ある時、バス停の傍の交差点でこの渋滞が起き、私

の乗りたいバスが交差点の向こうに見えるのですが、前を横切る車のせいで信号が4回変わるまで乗れませんでした。腹立たしいのを乗り越えて、唯、唯、あきれて見ていました。

こう書くと、自家用車のドライバーの運転マナーだけが渋滞の原因のように思われがちですが、バス自身も渋滞の原因を作っています。ご存知のように、北京のバス路線は沢山ありますが、運行予定表がありません。これは未確認情報ですが、バスの運転手と車掌さんは、給料の他に切符の売り上げ(乗客数)によって歩合賃金がもらえるのだと聞きました。そのせいでしょうか、やたらに急ぐバスがあります。停留所で停まる時も、無理やり、斜めに頭を突っ込んだ状態で停まって、他の車の通行を妨げたりすることが間々あります。

第2の大きな原因は、歩行者も含めた交通ルール、信号の不備です。北京では、前方の信号が青の時は、いつでも右折できます。道路の状況によっては、前方が赤でも右折はOKです。歩行者が、前方青になったので横断歩道を渡ろうとするのですが、絶えず右折車が来るのでなかなか渡れません。右折車の途切れた隙に渡り始めると、信号はもう赤に変わってしまいます。

歩行者は今まで随分待っていたので、これ以上は待てません。赤でも渡ってしまおうとします。歩行者がかなりの数になると、車は青信号でも進めません、車が停まると、歩行者が更に、次から次へと渡って、信号が信号の働きをしなくなります。車やバスからこの光景を見た時は、「北京の歩行者は、行儀が悪い。」と憤慨しましたが、自分が歩行者となって見ると、信号を無視して渡る歩行者の気持ちもわかってきます。ああでもしないと、現行の信号システムでは、歩行者がうまく渡れません。右折車に対して、歩行者優先を徹底すべきです。或は、歩行者信号が赤になってから右折を許可すべきでしょう。歩行者も次の信号で必ず渡れると分かれば、無理をせず次の信号を待つでしょう。交差点の信号システムをちょっと手直しするだけで、渋滞のタネが随分減ると思います。

もう一つの原因は、地下鉄工事です。私の行動範囲内では、現在、中関村南大街の海淀黄庄付近が工事で渋滞しています。工事がなくても、中関村から人民大学の間は、良く渋滞するところですが、今は慢性的な渋滞が起こっています。地下鉄が完成すれば便利になって、地上の車の通行も少しは減るかも知れません。これは、完成まで、ひたすら待つしかないのでしょうか。

二千年前の中国・春秋戦国時代^注に、悲劇の人として知られた二人の人物がいます。一人は、楚国の屈原で、もう一人は晋国の介子推です。この二人に関わる二つの名所と二つの祭りは後世の漢文化に深い影響を与えました。その二つの名所は、湖南省の汨羅江と山西省の綿山で、二つの祭りは、「端午節」と「寒食節」です。今回は、介子推に由来する「寒食節」をご紹介します。

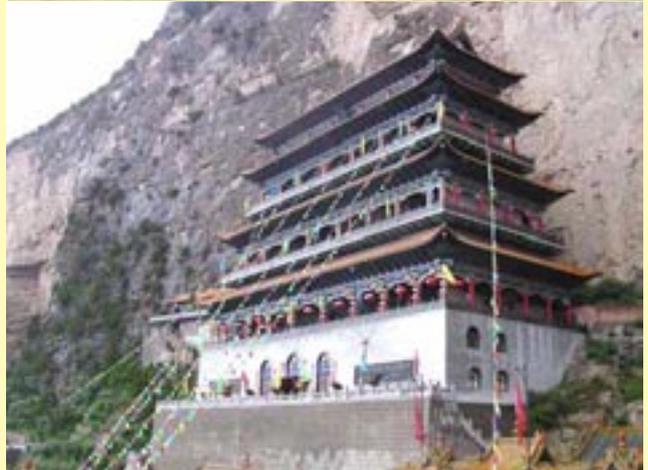
綿山は私の故郷である山西省の介休市にあり、省都の太原から車で約3時間で着きます。海拔2,566mの山は絶壁が切り立ち、多数の奇異な形の石があり、樹齢を経た巨木がいたるところに自生しています。香りのよい草が地面を被い、鳥のさえずりや渓谷の流れが耳にこだまします。

その綿山は悲劇の人、介子推の物語で人々に良く知られ、綿山には、現代に至るいろいろな時代に建てられたさまざまな建築物があり、それらは重要な歴史的文化遺産となっています。

時は春秋時代、介子推は晋国の君主・献公の息子である重耳^{ちようじ}に仕える下級役人だったそうです。しかし、重耳は相統争いに巻き込まれ、迫害されて外国に逃れました。19年に亘る重耳の亡命の間、介子推は忠義の心をかたときも忘れず、無数の艱難を乗り越え、苦勞を厭わずにずっと重耳の傍らにつき従っていました。重耳が餓えて歩けない時には、自分の腿の肉を取り、スープを作って重耳に食べさせたこともあったということです。後に重耳は晋国に戻って国君の座に付き、春秋五霸のひとりと数えられるほどの名高い晋の文公になりました。

晋国に戻って文公になった重耳は、ずっと自分に従って亡命していた者たちに論功行賞^{ろんこうこうしょう}を行い、それぞれを諸侯に封じましたが、介子推の事を忘れていました。介子推は元々富貴を求める人間ではなかったので、母親を連れて、綿山に隠棲しました。

後になって文公は介子推の事を思い出し、自ら綿山へ捜しに行きましたが見つけ出すことは出来ませんでした。文公は介子推が非常に親孝行なので、綿山に火を放てば、母親を連れて出てくるにちがいないと思いました。綿山は三日間燃え続き、山全体を焼き尽くしました。しかし、介子推は現われませんでした。介子推母子は木を抱きついたまま焼死していたのです。介子推は功を争うより死を選んだので



した。文公は深く悲しみ又深く後悔しました。綿山で介子推を手厚く葬り、廟を建て、綿山を介山と改名し、そして、介子推を記念するため、毎年、山を焼くその三日間は火を使って食事の用意をしてはいけなと世に命じました。それが「寒食節」の由来です。

晋は山西省の略称です。ですから山西省で生まれ育った私は晋の子孫だと言えるでしょう。この物語を読むたびに、心がいつも震えます。そして介子推が死よりも節操を重んじ、功名や利益よりも義侠を重んじる価値観に感服しています。そして、介子推たちのような忠臣に守られなければ、晋の文公の存在はなく、強大国の晋国も無く、寒食節もなくなります。歴史もきっとまったく違うものになってしまっているでしょうと思います。

注 周の東遷から晋が三分して韓・魏・趙が独立するまでの約360年間(前770～前403)。周室の権威が衰え、諸侯が抗争のうちに淘汰され、一方相次ぐ異民族の侵入に対して尊王攘夷を名目として有力諸侯が糾合し覇権を唱えた。

(寒食節は、山西省では清明節の前の日になっていますが、所によってはその前の二日になっているところもあります。)

劉先生の話は、黄土高原来信の第一部でも紹介されました。読まれた方も多いかと思います。劉先生の話では、中国農村部の厳しい教育事情が見え、周路先生が陝北の女の子を紹介したいと思った気持ちが分かるかと思ってもう一度掲載します。

田井

北山小学校が新学期を迎えました。けれども、劉先生の姿が見当たりません。先生を辞めたという噂です。ここでの仕事がどのようか、どんな待遇なのか、どうして先生を辞めたのか等の理由は私が一番よく知っています。

土崗県の北山小学校は規模もかなり大きく、34人の児童が勉強しています。《陝北女娃》という本を纏めるため、私はここに数回ほど取材に訪れて写真の撮影をしました。北山小学校には天真爛漫で、顔立ちもいい可愛らしい女の子たちが結構いるのです。例えば、陝北特有の“まつげ^注ちゃん”の芳芳^{fāng fāng}、人に会えば笑顔がこぼれる“えくぼちゃん”の海海^{hǎi hǎi}、お母さんの再婚で山西省から来た、真ん丸い大きな目で前歯のない文文^{wén wén}。それに物静かでおとなしい欢欢^{huān huān}、勉強大好きで考え深い彩彩^{cǎi cǎi}などなど。私は彼女たちが学校で勉強をしている様子、放課後の遊んでいる姿、家庭環境を撮影し、彼女たちと話しもして、家族構成や年齢、普段楽しんでいることや将来の希望などを知りたいと思っていました。

注) 原文：毛眼眼 陝北の人は、眼が大きくてまつげの濃い人が多い。

作業が順調で、収穫も可なりあるのは、全て劉先生の熱心な協力と取り計らいのお陰なのです。私が学校を訪ねると仕事を置いて、私が取材したいと思っている子どもたちに会えるよう計らってくれ、それぞれの子どもたちの学習状況や性格などを進んで話してくれるのです。

劉先生がこつこつと心を込めて指導の準備をし、授業を進めている姿を忘れられません。一間きりの粗末で薄暗い窑洞に、30人を超す子どもたちがひしめいています。机は1台に3人だったり、学齡前の子どもたちはなんと1台に4人が座っています。彼女が教科書の読みを指導すれば、朗読の音がわんわんと耳を聳するばかりに響きます。30何人かの子どもたちの汗の匂いが教室に充満し、空気も淀んで息も詰まりそうです。けれども、劉先生は楽しくてたまらないといった風で、3年生に国語を教えるかと思えば、2年生に算数を教え、1年生に地理を教えているかと思えば、学齡前の子どもにも拼音^{ピンイン}（中国語の発音記号）を教えるといった具合でてんでこ舞いをしています。

実は、劉先生自身もまだ大人になりきれない少女で、自称では、「今年、18歳」といっていますが、実際はまだ18歳にもなっていないのではないのでしょうか。彼女もかつては夢があり、美しい人生に憧れて街に出て仕事をしたいと望んでいましたが、現実が彼女の美しい憧れを打ち砕いてしまいました。劉先生は黄河河畔の劉家山村の出身ですが、この辺りの女の子の殆どは小学校を終了すると進学はせずに家庭に留まり、彼女のような、成績優秀で県の中学校に合格するケースはあまりありません。それにこの貧しい山村では試験に受かったとしても、進学できるかどうかは家庭の経済状況と家長の方考え方によって決められてしまいます。



北山小学校の子供達と一緒に

劉先生の父親は、女の子が上級学校に進学することの意義を全く認めない人でしたが、母親の方は娘の気持ちを理解し、密かにお金を出して娘が縣市（県庁所在地のある市）で勉強を続けられるようにしました。街の学校での勉強は厳しく、生活もまた苦しいものでした。彼女の一月の生活費はたったの20円で、これは一日平均1元にもならないということです。しかも学用品や生活用品を購入しなければなりません。彼女がいったいどんな風に毎日を過ごしたのでしょうか。私に語るところでは、一日に1個の蒸し饅頭（小麦を丸めて蒸したもので、中に餡はない）を買うだけで、というも蒸し饅頭は比較的大きいので、半分は昼食として食べ、夜に残りの半分を食べ、朝はお湯を飲むだけで過ごすこともしばしばだったそうです。おかずは家から持ってきた漬物だけで、それもなくなってしまえば補充出来ないのはいうまでもありません。このようにしてどうにか中学2年を終了しましたが、3年生になっても、父親は彼女が勉強を続けることを強く反対し、高等学校に合格しても気持ちは変わらないと言います。劉先生はすっかり気落ちして、どうにか頑張ってやっと2年前に中学を卒業すると、学校に未練を残しながら黄河岸辺の村に戻ってきました。

山村の中学卒業生は歓迎され、すぐさま村のある小学校の先生に迎えられ、半年後に又別の小学校の先生になりました。北山小学校はこの2年間で3番目の小学校です。これは劉先生の落度でもなく、教師としての力量が足りないからでもなく、報酬に関わることです。読者の皆さんは、この忙しい仕事の毎月の給料が、一袋の小麦粉と100元と聞いたら気持ちが寒くなるでしょう。ここでの教師は、国語、算数、歴史、地理、常識、音楽、美術などの科目全てを教え、しかも、1年生、2年生、3年生と学齢前のクラスに分けて教えなければなりません。ある所では4年生のクラスも受け持ち、一週間の間に休日はなく、仕事は毎日、朝6:00に始まる早朝勉強から、夜間の自習に至るまで続く激務です。しかもこのたった100元の給料は学期が終わっても支払われず、の期限なしのある時払いで村長から簡単な借用証書が手渡されることもよくあり、劉先生が前任校で働いた結果は、2枚の借用証書が残っただけでした。しかも、北山小学校でも同様な待遇とのことで失望してしまったということです。誰が彼女の決断を責められるでしょう。いったい、100元とはどんな金額ですか？街のレストランで食事をするには不足です。中級のタバコダースなら何とかなるかもしれませんが。アメリカドルに換算すればたったの13ドルです。

私はこの地の子供たちに同情してしまいます。劉先生と同じように勤勉で誠実に教育に携わっている村の先生た



2005年の劉老師

ちにも同情します。中国の憲法は、公民は9年間の義務教育を受ける権利があるとありますが、それでは、この9年間の義務教育というのは誰の義務ですか？それぞれの義務ですか？家庭の義務ですか？政府の義務ですか？国の義務ですか？村の教師の薄給はどのクラスの政府が支払うのですか？このことを関係部署で訊ねて回りましたが、どこからも明確な答えは得られませんでした。

最近又、私は黄河岸辺の劉家山村を訪れ、何もしないで家にいる劉先生を見て、もう一度教師を務めてみたらどうかと勧めましたが、逆に劉先生に問い返されてしまいました。「給料が支払われないばかりでなく、指導に使う教科書や白墨の類に至るまで全部自分で用意しています。どうして教え続けられますか？」。私は返す言葉もなく、黙って“義務”という二文字を考えました。“義務”とは一体どんな意味なのですか？

私は劉先生にはアンケートに答えてもらいませんでした。私が劉先生と知り合ったときには既に学校を卒業し、既に社会人になっていたからです。そしてこの厳しい現実には先生が再びロマンチックな未来を思い描く何の力にもならないでしょう。

(田井記)

小刘老师

zhōu lù
周路

北山小学开学了，可是小刘老师的身影却没有见到，她不干了，按照城里人说就是辞职了。这是一个什么样的职业，怎么样的待遇，她又为什么不干了，个中原因我最清楚。

北山小学在土岗乡是个规模较大的学校，有三四十个学生娃，为了编写《陕北女娃》一书，我数次来此采访，拍照。这里有许多天真活泼、漂亮可爱的娃娃：有陕北特有的“毛眼眼”芳芳、有见人就笑的“小酒窝”海海、有圆圆的大眼睛却掉了大门牙的随母改嫁来此的山西小姑娘文文、有清秀文静的欢欢、爱学习善思考的彩彩等等。我拍她们读书学习场景，课外戏耍活动，家庭生活环境，和她们交谈，了解各位家庭成员、年龄、平时爱好与长大了的理想。工作进展顺利，收获颇丰，这一切都应归功于小刘老师热情支持与配合。只要我一踏进校门，她总是停下手中的工作，先行安排我要采访的对象，并主动介绍各位学生的学习情况，性格特征。

小刘老师认真备课，认真授课，兢兢业业，一丝不苟，令我十分难忘。在一间简陋、阴暗的窑洞里，拥挤着三十几个学生，有的三人一桌，学前班的娃娃竟然四人挤一张桌子。她带领学生读课文，朗朗的读书声震耳欲聋，三十几个娃娃的汗水弥漫教室，空气实在浑浊不清，令人窒息。而小刘老师却是津津乐道，一会儿教三年级的语文，一会儿教二年级的算术，一会儿教一年级的地理，一会儿教学前班的拼音，忙得不亦乐乎。

其实小刘老师自己也就是个半大的姑娘，她自己说今年十八了，可实际年龄要小些。她也有理想，憧憬着美好的人生，她希望在城市里找份工作，但现实打碎了她的美好愿望。小刘老师就出生在黄河畔边的刘家山村，这儿的女孩大凡读完小学便辍学在家，像她这样以优异成绩考入县中学的还不很多，况且在这贫困的山区里考上了能否上学还得取决于家庭经济和家长的态度。她的父亲认为女娃娃继续上学毫无意义，倒是她母亲善解人意，拿出私房钱亲自送女儿去县城读书。在城里读书是紧张的，而生活又是艰苦的。

她一个月只有二十元的生活费，就是说平均一天

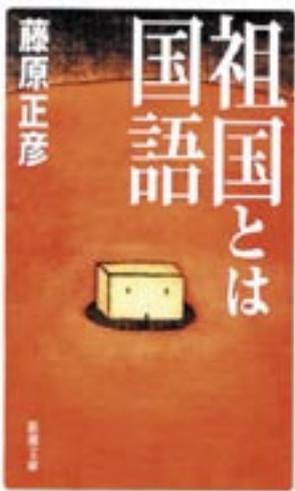
还没有一元钱，而且还要购置学习生活用品，真不明白她是如何度日的。她告诉我自己常常是一天只买一个馍馍，因馍馍比较大，所以中午吃半个，晚间吃半个，早晨喝点开水也就凑合了。菜是家中带来的咸酸菜，吃完了自然无法补充。就这样她不可思议地读完了初中二年级。初三时她父亲还是明确表示不同意她继续上学，说即使考取高中也是如此，因此小刘老师情绪受到很大影响，两年前她总算勉强读完初中，离开了她恋恋不舍的学校，返回黄河岸边的家中。

山区里的初中生还是受欢迎的，她很快聘为一所乡村小学的老师，半年后转入另一所小学任教，北山小学是她两年间任教的第三所学校，我知道这不是她的过错，不是她的工作教学不力，而是与报酬有关。说到报酬会令所有读者听了心寒，每月只有一袋面粉和一百元的工资。而她的工作量是多少呢？这儿的教师普遍要教授语文，算术，历史，地理，常识，音乐，美术等课目，还要分别教授一、二、三年级和学前班，有的地方还设四年级，一星期没有休息日，一天从清晨六点开始早读，一直到晚间学生自习，工作量之大可见一斑，然而更令人痛心疾首的是即使这区区一百元的报酬，学期结束也无法兑现，常常是村长打个欠条给你，啥时有钱啥时付钱，没有期限，小刘老师前面两个学校任教的结果就是两张欠条，而这次北山小学同样也面临这种待遇，太失望了，难怪她决心不干了。

一百元钱是个什么概念呢？在城里下饭店不够，买条中档香烟尚可，折合美元也就十三元。我既同情这里的学生娃娃，也同情像小刘老师一样仍大勤勤恳恳地教书育人的乡村教师们。中国的宪法规定公民享有九年义务教育的权力，那么这九年义务教育指的是谁的义务？个人的义务？家庭的义务？政府的义务？国家的义务？乡村一级代课教师的微薄工资该由哪级政府支付？为此我咨询了有关部门，回答莫衷一是，没有明确答案。

最近我又一次来黄河岸边的刘家山村，看看赋闲在家，无所事事的小刘老师，我劝她继续当教师，她却反问道：报酬拿不到，备课用的书本，粉笔之类还都要自己掏腰包，怎么能教下去？我哑口无言，默默地捉摸着“义务”二字，到底是什么意思呢？

我没有请小刘老师作“问卷”，因为从我认识她起，她已经是离开校门进入社会的人了。此时严酷的现实已无法让她再去憧憬浪漫的未来了。



藤原正彦氏が満州生まれで、^{ほうほう}這這の体で引き揚げてきたことを、本書で初めて知った。タイトルが「祖国とは国語」である。まさかこの本で中国とぶつかるとも思わなかったが、最終章の「満州再訪記」で心に感慨深いものが染み渡った。

満州再訪は、妻のだしめけの提案で決まった。父・新田次郎氏が存命中は、そ

のトラウマから拒まれていた満州再訪。夕食時の提案に、母・藤原てい氏が積極的に賛成。躊躇している著者の背中を、「行く」と即答した息子たちの無邪気さが押した。

中国の都会の変貌は、言うまでもない。ある映画で「(あまりに変貌が激しくて)一週間もいと迷子になる」と言った主人公がいたが、その町で、50年以上も前の形跡を探すのは無理難題ともいえる。その無理難題を前に藤原一家は苦戦。生まれた病院はすぐ見つかったものの、住んでいた場所がわからない。ごみご

みとした町中で著者は失望する。

再訪の物語は、戦争の時代と今現在の中国を行ったりきたりする。軍の無能・身勝手、諸外国のしたたかさ、引き揚げ時の緊迫と、今著者が歩いている中国、一緒に旅をする家族や仲間の^{のどか}長閑さ。母は、夫の職場の位置だけは明確に覚えていて、一行はかつて中央観測台のあった丘陵で亡き父を想う。中国の高台に、父が好きだったコスモスが揺れていた。

残りはかつての住居だけ、というときに、三男が、母・藤原てい氏が引き揚げの体験をもとに綴った「流れる星は生きている」を取り出す。そこからの手がかりで辿り着いた故郷。建物自体は壊されていたが、確かにそこは家族が生活を営んでいた場所だった。家族がかつて遊んだ旧新京動物園は美しく、著者はやっと充実感を味わう。

幼い子どもたちを連れ、一年かけて日本に戻った母へ、著者が語りかける。一年かかった道のりが、今は飛行機であつという間だと。母も、もうお前たちが足手まといにならない、と切り返す。重い過去が、流れていく、乗り越えられていく。現在の幸せの前に、小さくなっていく。生きていくというのは、そういうことなのかもしれない。

(真中智子)

【わたしが調べた四字熟語 1】

がしんしょうたん 臥薪嘗胆

三澤 統

ちょっと古い話題ですが、昨年のプロ野球日本シリーズ、阪神はロッテに4-0で完敗しました。

その時、ある阪神ファンが「優勝劣敗は世の常、済んでしまった勝負にあれやこれやと言うのもせん無いこと。すべてにおいて劣っていたと猛省し、前向きにまた歩き始めましょ。また1年、苦勞・辛抱はあたりまえ臥薪嘗胆(がしんしょうたん)でおます！」と言っていました。

臥薪嘗胆(卧薪尝胆)を、「中日辞典」(小学館発行)で引いてみますと、「薪の上に臥し、苦い胆を嘗める。臥薪嘗胆。仇を討つために苦心して闘志を励ますこと。(転じて)目的を成し遂げるために刻苦して自らを励ますこと」とあります。

実は、この四字熟語は、春秋時代(紀元前770年～403年)末期の呉越の戦いを「史記」が記録したことに始まります。その要旨は次の通りです。

『互いに隣国同士である越と呉の間で熾烈な戦争が続いていた中国の春秋時代。越王の^{こうせん}勾踐に父を殺された

呉王である夫差は、復讐の志を奮いたたせるため、ごつごつして痛い「薪」の上に毎晩寝て(臥薪)、三年後遂に越の王勾踐を降伏させた。一方、敗れた勾踐は室内に干した胆を掛けて、これを嘗め(嘗胆)、その苦さで敗戦の屈辱を忘れないようにしていた。そして二十二年後勾踐は夫差を滅ぼした』双方ともリベンジへの執念は恐るべきものです。

‘わんりい’の会には、「中国語勉強会」という中国語講座があります。毎週火曜日、19:00～21:00です。講師は、天津師範大学数学科卒業の郁唯先生。とても楽しい講座です。

1992年、‘わんりい’の設立と同時に始まりました、というか、中国語講座の開始と共に‘わんりい’の活動が始まったといった方が正確かもしれません。というわけで、既に13年続いています。郁先生の熱心なご指導にも拘らず、中国語の進歩はさっぱりですが、中国の文化や考え方に親しむとてもいい機会になっています。

そんな仲間の、三澤統さんが、日本語の中でよく使われる四字熟語の意味と由来を調べてくださることになりました。思いがけない発見があるかもしれません。乞う、ご期待です。

▶「銘水」あり

「新街鎮」の商店街は、みな坂道に沿って並んでいる。アニメ映画、「千と千尋の神隠し」に描かれた温泉町に雰囲気似ていると思った。家並みの一角でポンカンほかの果物を売る民族衣装のおばさん露天商が並び、朝からにぎわっていた。

路端に小さなあづま屋があり、そこで小鳥の「鳴き合わせ」をやっていた。あづま屋の梁に、鳥かごを一列に幾つか下げて、鳴かせている。それを飼い主の老人らが満足げに見上げていた。優雅なこの遊びは話には聞いていたが、実物を観たのは初めてだった。都会の趣味かと思っていたがそうでもないようだ。緑色の布きれで覆ったこぎれいな鳥かごが常番のようだ。1人で必ず2つの鳥かごを大事そうに持ち歩いている。同行のAさんによると、小鳥が2羽でいると、縄張り意識を呼び起こし、よく鳴くそうだ。

大きめの空ペットボトルを何個か提げて道行くおばさんがいた。近くに「銘水」が湧出するのであるか？。興味があったのであとをつけた。おばさんは横道に入ると、民家の塀に挟まれた狭い石段を降りていった。階段の先は家並みが途切れ、傾斜した畑が谷へ下っている。家並みと畑の境には石垣があり、「銘水」は石垣の下部に差し込んだパイプから流れていた。まわりに、水をくみに来た人々が数人、順番を待ちながら歓談していた。こんな山の中腹に湧水が湧くのは不思議だが、乾季の冬でも、水が豊富な地方なのであろう。元陽の街はどこから都市用水をまかなっているのか、地形からは水が有りそうもないのだが。帰国して調べたら東京の年間降水量が1460mm、元陽はかなり多く1600～3000mm^注と、分かった。そうでないと、あの気の遠くなるような棚田への給配水ができない。

ホテル戻って、朝食の米線^{ミーシェン}を味わう。ここの米線はことにうまく、歯触り喉ごしとも大変よろしい。歯切れの良さは新潟地方の「へぎそば」そっくりだと思い当たった。乾麺ではなく生麺で、これがうまさの要因の一つであろう。

▶「棚田」見物に出発

今日の予定は、バスで棚田めぐり。中国語で棚田は「梯田」夕



哈尼族「愛春村」のたたずまい。素焼きレンガにスレートが標準的な民家。背後の山は「白岩子山(2939m)」、元陽景最高峰。

ンボのハシゴというわけだ。「新街鎮」で宿泊したホテルの名前も「雲梯大酒店」で、棚田の観光客を大いに当てにしているようだ。

10時にホテルを出発すると、バスはうねうね続く山道をひた走り、尾根を越えて別の谷に入る。1時間30分ほどで、攀枝^{パンジ}花^{ホア}地区の一画にある「棚田見晴台」に着いた。そこは崖の上にせり出したコンクリート造りのバルコニーである。三方の虚空に柵を巡らし、一方が道路に接している。コンクリートがまだ新しい。俯瞰するとなるほどすごい棚田の規模である。夕日で観るのは、作った人に申し訳ないような気もする。田起こし、田植え、稲刈りなどの農作業はきついであろう。

そういう心を見透かしてか、みやげもの売りの子どもたちが、見晴台を本拠地にして待ちかまえていた(大人もいる)。手作りの民芸品を買えといつてまとわりつく。小学生ぐらいで、女の子ばかり十数人、民族衣装を着てかわいい。

雲南省南部の山村は、パースと呼ぶ低地に傣族の村落あり、二期作の水田をつくる。同じ地域の稲作可能な南面の山腹には哈尼族が棚田を作る、ここは温度がすこし低いので一期作。彝族は水田を作らず、稲作に適さない山腹を畑を耕作するそうだ。低地の「パース」は、標高が低いので夏は蒸し暑く、快適ではない。こためマラリヤなどの風土病をおそれて、免疫を持つ傣族以外の他民族は住まないそうだ。したがって、棚田を作るのは、哈尼族のみらしい。

子供らは、我々がもう買ってくれないと判ると、自分たちが歌や遊戯を始め、「商店売り子」から「遊ぶわらべ」に変身した。別の棚田を観るため、少し元陽寄りに戻ったと分かれ道からしばらく行った「胜村」の食堂で昼食にした。

昼食の後、横道をさらに進み「愛春」という村を訪れて集落の、のどかな山村風景の中を散歩した。標準的な民家は、日干しレンガ造りで2階建て、屋根は丸太を組み、細長いスレートの瓦を乗せている。1階部分はブタなど家畜を飼っていて、2階が住居になっている。窓は小さく暗く、南国の強烈な日差しを避ける作りである。

村内に湧水を利用したコンクリート造りの共同井戸が数か所あり、野菜を洗ったり、洗濯場となっていた。棚田を眺めるのだから水は豊かだ。放し飼いの犬どもがときおり現れて不機嫌に吠えたが、顔つきよりより気質は軟弱で、積極的に攻撃を仕掛けることはなかった。村の子どもや老人の写真を撮らせてもらって、この村を後にした。

夕方は今日の重要な目的、「棚田の夕陽」を鑑賞して撮影する手はずになっている。ウリさんが前もって決めてある心づもりの場所があり、そこまで車で移動。夕陽を観る有名ポイントの一つなので、入口に観光客相手の茶屋があり、そばに公衆トイレも用意されている。車を止め見晴場所まで少し歩く。

見晴台に着いて広い谷に対峙すると、うろこのような階段状の棚田が、一つずつ青空を写し入れて、谷底に落ち込んでいた。

日没が迫ったが、棚田は期待したような色には焼けなかった。私は、前もって計算したような色に焼けたら、面白くない



日の出の写真を撮っていたらくわえたばこの人物が横切った。

ではないか、と少し思い、今ある景色を楽しんだ。

暗くなってからホテルに戻り、前夜と同じ郷土料理店へ繰り出して大晦日の宴会となった。

▶素足にサンダル、首にてめぐいで日本人と…

食事が済み、ほろ酔い機嫌でホテルに戻った。ホテルまでは歩いて5分ほどなので、素足にサンダル履き、首に手ぬぐいを巻いて、くつろいでホテルのロビーを歩いているといきなり呼びかけられた。「日本人ですか？」

玄関の方からやってきた一団がいて、そのうちの1人が私に訊いたのだ。そうだと答えると、彼も日本人で、タレントだという。彼は、雲南省の奥地で日本人に会うとは思わなかった旨のことをいった。私は、棚田の撮影で日本人が何人も元陽に来ているのを知っていたので、あまり感激はしなかった。彼に同行していた、中国人の大男は俳優、監督で「姜文」^{ジァンウエン}氏、撮影の仕事でここに来ているという。私は、旅番組のタレントだろうと勝手に思いこんでしまい、ほどほどに対応したが、帰国してから調べたら、「姜文」氏は私も観ている大俳優で、張芸謀監督^{チヤンイーモウ}作品などに主演で出演しているのではないかと。勝手に写真を撮ったりして失礼なことをしてしまったし、もっと丁寧に出演作などを訊いておけば「観た観た」と云ってあげられたのにと悔やまれた。同行の日本人タレントは「香川照之」氏で、近作「鬼

が来た！」で両者が結びついたらしい(田井光枝先生説)。「鬼が来た！」はなぜか中国では上映禁止で「姜文」氏も映画出演自粛を告げられた境遇だったそうなので、撮影作を応援てあげればよかった。撮影中の映画は「太陽再次升起(日本名は不明)」という、ぜひ見に行こう。

▶去年と日の出の場所が違う？

次の日は、2006年1月1日となる。「棚田の日の出」写真を撮ることになっていて、ホテルのロビーに朝5時30集合。まだ真っ暗である。さあ出発、と玄関そばにとめてあるバスに近づくと、黒塗りの乗用車がバスの進路を塞いで駐車している。なんだこれは？ どういうこと？。このような場合中国では、ホテルのフロントではなく、門衛の責任範囲だそう。彼を呼んで車をどけるようにせかせかせた。門衛氏はあわてた様子であったが、しばらくしても、車はでんと居座ったままだ。ウリさんに経過を訊いたところ、門衛氏は進路を塞いでいる車の持ち主が誰かは控えず、控えたのは彼の携帯の番号だけで、その番号に掛けたが応答がない。どの部屋に宿泊したかも判らないから呼び出せないそう。仕方なく、バスの隣に駐車している2台のトラック運転手に起きてもらい、このトラックを移動してやっと抜け出せた。無関係なトラックの運転手には、新年早朝から夢を破ってしまい気の毒であった。

思わぬ障碍で30分ほど遅れて出発、棚田を望む日の出鑑賞地点へ向かった。幸い、目的の場所へは日の出前に到着、まだ暗い山腹の道ばたがその場所であった。すでに数台の車が思い思いの間隔で路肩に駐車し、路上には三脚を構えた何人かの影があった。少し風が吹き、寒い。バスの脇が風よけとなって寒さから逃がられるので、数人の男たちが三脚ともども移動してきた。厚かましくも挨拶はない。ゆで卵を売りに来た土地の女性が、子ども連れで手品のように突然現れ、往き来する。1つ1円で皆で買い、食べたところなかなかうまかった。

やがて東の空が白んできたが、空は思うような色合いに焼けなかった。それどころか景色が、夜から朝になっても太陽は山陰から現れない。鳥瞰する棚田群は、あけぼののぼんやりした情景だったが、次第にすべてがくっきりに見わたせるようになった。それでも、山陰から出るはずの太陽を拝むまではかなり間がありそうだった。

ウリさんは首をかしげていった。

「去年は、ここから朝日が昇るのが見えた、今年は日の出の場所が変わったらしい」

雲南省では、太陽の軌跡も一年ごとに変わるのか？

日の出写真はあきらめ、朝食を摂りにホテルに戻った。期待を裏切らない、うまい「米線」にみな喜んだ。朝食が済むとすぐに次の訪問地、「新平」へ向かった。

雲南省南部は、歴史書によるとタイ族の王国が現れたり、元王朝との戦いに明け暮れたりなどなど、秘められた歴史があった。象に乗った軍隊もいたというから、すごい。 ▶続く



2006年1月1日なかなか出ない“日の出”を待つ。背後の山は前ページと同じ「白岩子山」。去年と位置が違った？。

注)人民教育出版社(中国)ホームページより

チベット族の聖なる山・四姑娘山 その3ー楽しみ方 ドライブと周辺の観光

大川健三 (中国四川省四姑娘山自然保護区管理局)

海ドライブによる花畑巡りや峠からの風景観望

▶ 巴郎山

四姑娘山の手前に有る4500m前後の巴郎峠一帯はヤクが放牧されている広大な草原で、自動車道路が走っています。4月から9月に掛けて多種多様な花が咲きます。自動車を下りて少し歩けば広大な花畑の中です。峠からの四姑娘山の眺めは絶景で、横断山脈のチベット文化圏に入ろうとする感動が沸き起こります。峠の西側を少し下った所から、頭を覗かせた四姑娘山主峰6250mが見えます。さらに下った日隆の直ぐ手前に猫鼻梁の展望台があり、四姑娘山の南面を一望できます。

参考資料 森 和夫:「中国のらん 中国野生蘭彩色図譜」
巴郎峠への道ー百花繚乱の峠道ー. あるて出版,
p84 ~ p88.1997.

●行程と海拔高度(概略値)

成都(500m)→(3.5h)巴郎山(4500m)→(0.5h)日隆(3200m)

* 所要時間は小型車や高速道路を利用した場合で、休憩時間を含みません。



巴郎峠からの四姑娘山

▶ 双橋溝

双橋溝は長坪溝の西隣に有る渓谷で自動車道路が走っています。渓谷の両側に急峻な岩峰が聳え立ち海子も有ります。4月から10月に掛けて多くの花が咲きます。広い花畑が幾つも有ります。秋には唐松林が黄葉します。特に降雪期の姿が美しく「東洋のアルプス」の名前が相応しい渓谷です。渓谷の中程の大溝出合いにチベット族の小さな茶店がありバター茶や素朴な味わいのパンを食べられます。

●行程と海拔高度(概略値)

日隆(3200m)→(1.5h)双橋溝の終点(紅杉林)(3800m)

▶ 夾金山森林保護区

夾金山の峠一帯は巴郎山に似た風景と植生を持ち、5月

から9月に掛けて多種多様な花が咲きます。自動車を下りて少し歩けば広大な花畑の中です。山上や峠の南側を少し下った所に海子も有ります。ここは古来からチベット族と漢族が行き来したルートで、18世紀の金川の役における乾隆帝の軍隊や紅軍も通りました。

●行程と海拔高度(概略値)

日隆(3200m)→(2.5h)夾金山の峠(4100m)

周辺の楽しみ方



臥龍自然保護区のパンダ

保護研究センターでパンダを見学できます。特別料金を支払えばパンダを近接撮影できます。日本を始めとするWWF(世界自然保護基金)の援助が行われている所です。2002年に改装した博物館ではパンダを含む動植物の生態を展示しています。ホテルも有ります。隣接する土産物市場では木の葉蝶を含む色鮮やかな蝶の標本や薬草が並べられています。

●行程と海拔高度(概略値)

成都(500m)→(2h)臥龍(2000m)

* 所要時間は小型車や高速道路を利用した場合で、休憩 時間を含みません。



丹巴風情保護区の石積みの塔や民家

古いチベット文化の歴史を持つ丹巴では美しい石積みの大きな塔と民家が最も印象的です。大きな塔は狼煙台や富の象徴で、古代においては戦争道具でした。

民家は白く塗られ窓や扉やテラスは彩色されています。民家の平屋根には魔除けの尖った石が並び、檜科の葉を燃やして祈る焚火台が有ります。領主の砦跡や寺も見られます。

15世紀に建立されたラマ寺には初期ゲルク派(黄教)様式を持つ壁画が残っています。2000年以上の歴史を伝えるボン教の寺も有ります。聖山のモルドは雲母を多く含む巨大な岩山で、山腹や麓にボン教やラマ教や漢仏教の寺が有ります。

モルドの語源は鷲の嘴のように尖った岩で、女王の岩とも呼ばれました。古代において女王がこの地域を支配していたからです。丹巴では民族工芸が盛んで民族衣装や装飾品等の手工芸品が市場に多く並べられています。

丹巴が在る金川流域は古代から多くの金を産出し、西域の部族や吐蕃系部族や西夏の残党が流入して先住の羌族などと同化した地方です。四姑娘山も同じ地方文化圏の中に有ります。四姑娘山から丹巴へ行く途中に在る沃

今回は、ケニアに暮らす農村の人々の普通の暮らしを紹介したい。都市を除く人口の70%は農業に従事しており農業国といえる。かつてタンザニアの大統領であったニエレシは、「世界が宇宙を目指す中、私たちは農村を目指すべきだ」と言ったことがあった。農業で生きていく経済というのはどういふものかを実感したのはケニアの農村を訪ねるようになってからだった。

OTHAYA(“オザヤ”)という農村がある。ケニアの首都ナイロビから車で2時間ほど北上したところにあり、紅茶の産地として有名な所だ。近年は、3年前に代わった新大統領の出身地としても有名だ。3年程前、ほんの数日の滞在であったがこの地を私は訪ねた。外国人が訪ねてくることもない、観光するところもないケニアの農村。ケニアの最大部族であるキクユ族しかいないこの村に着いたときから、キクユ語のラジオ、音楽、服装、食べ物しかないことに気がついた。車でたった2時間の場所のここでは、もうナイロビのように英語やスワヒリ語が聞こえてくることもなく、世界のさまざまなレストランが軒を連ねていることもなく、単一民族による単一の文化が生きていた。急に、より一層外国人になったような気になる。自分の言葉をわかってくれる人がいなくなったような気がした。とある一家に泊めてもらうことになっていた。

バスターミナルからその家までは、歩くと1時間の道のりであるが、乗り合いタクシーを利用することにした。タクシーといっても、普通のバンタイプの乗用車である。出発は、車が満員になったらということでひたすら待つ。しかし、1時間以上たっても人が集まらない。集まってくるのは、荷物なのだ。そして荷物で車がいっぱいになって出発する。車の

客は、袋に入ったじゃがいも、足を縛られている数羽の鶏、その他マットレスなどの日用品、そして私。荷物は、それぞれの家の前で降ろされていく。荷主を車が抜かして行くこともある。人は歩くのが基本なのだろうか、みんな何時間もかけて歩いて帰るようだ。2時間たってようやく家に着いた。こんなに待つなら歩いても良かったかな、いや歩いたほうが早いと思いながら。

5人家族のお父さんお母さん、子供たち3人が迎えてくれる。両親は英語が話せると分かり少しほっとした。子供た

ちはキクユ語がメインで、普段はあまり使わないスワヒリ語、学校で習う英語を話すことには戸惑っているようだった。ナイロビの子供たちのように3つの言語を幼い時から使い分けているのとは違う。

早速、皆でお昼ご飯の準備をする。家の裏にある畑から野菜を採ってくる。ジャガイモ、キャベツ、ニンジン、タマネギ、トマトなどを食べる分だけ採る。子供たちとそれらを洗って、切っている間にお父さんが大きな丸太を切り分けて薪を作っている。すべての用意が出来てお母さんが登場。スフリアと呼ばれる丸い鍋の中に野菜を全部入れて煮る。野菜が柔らかくなるとそこへ米を入れてさらに煮る。野菜の混ぜご飯のようなものだ。そこへ塩を軽くふる。

平日のお昼に家族全員でご飯を作ったことのない私はものすごく贅沢な時間だなと感じた。家族で鍋を囲んでいるんな話をする。ラジオからはキクユの音楽。それ以外は鳥の鳴き声。紅茶を育てる高原地域の生暖かい風が吹きぬけている。よく笑うお母さん。よくしゃべる子供たち。それを優しい目で見ているお父さん。ご飯が炊き上がる。5人分にしては大きすぎる鍋だなと思っていたが、その理由



牛にやる草を刈る



紅茶畑にて

は後からやってくる近所の人たちの分らしい。簡単なお祈りをしてから頂く。その優しい素朴な味は、今まで味わったことのない味だった。野菜は野菜の味がする。

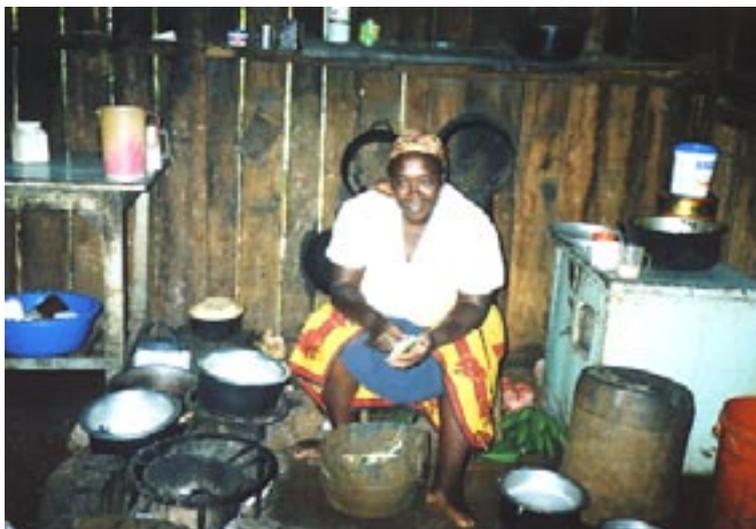
午後は、牛にあげるネピアという草を刈る。草刈りの後は、乳搾りをする。ケニアでは、牛は、時に結婚の結納品であり、お母さんの牛もそうだったということで、すごく大切に世話をしていた。飼ってるウサギや鶏にえさをやり、家の掃除をする。その後、搾りたてのミルクで、熱いミルクティーを作ってくれた。

“ハランベ”という文化がある。スワヒリ語で“助け合い”というような意味だ。冠婚葬祭や困ったときに互いが助け合うという制度である。この日は、とある家庭の子どもが高校で学ぶ費用をみんなで少しずつ出し合うというハランベの集まりがあるという。お母さんと出掛けた。お母さんは、日本円にして100円ほどを封筒に入れ、ハランベの主催者のお母さんに渡す。食事やお茶が振舞われ、祈り、歌い、踊る。そして、おしゃべりを楽しみ帰る。総勢30名くらいの参加で、一学期間の学費は賄える計算だ。そうやって学校へ子供を地域ぐるみで支えて通わせることも出来る。病気の治療費、海外の大学に行く費用、お葬式の費用等急な出費があるときはこのハランベを利用することが多いそうだ。もちろん自分が協力出来る範囲のお金や物でよい。

農村では日常的な暮らしには困らないが、貨幣にあまり頼らなくてすむ社会なので、冠婚葬祭や学費、医療費という急で多額なお金を必要とする際は困ってしまうのである。こうして助け合う姿に「農村では一人では生きていけないよ」という言葉に納得できる。

その後、家に帰って洗濯を始める。子供達が汲んでくれた水で一枚一枚手洗いしていく。大きなバケツに服と水を入れ、石鹸で擦る。あつという間に腰が痛くなる。横にいるお母さんは、歌を歌いつつ余裕の顔できばきと洗っている。洗い終わった服は、子供たちがロープに干してくれた。明日のお昼には乾いているだろうとのこと。2時間ほど洗い続けた。

日も暮れ始める時間。夕食の準備をする。お客である私のために鶏をプレゼントしてくれるとのこと。早速鶏小屋にいた一羽が、首を落とされてキッチンへとやってきた。それを熱湯につけて羽を落とす。お母さんが包丁を使って解体していく。トマトと油で炒め、水を加えて2時間ほど煮た。鍋を囲んで、家族が集まっているいろいろな話が始まる。出来たスープに少し塩を加える。お皿に鶏肉が盛られ、コップにスープを注がれる。白いご飯も用意されていた。何一つ複雑な味付けはない。しかし、その鶏肉とスープの味は、



台所



子ども達

細胞に染み渡るように美味しかった。まるで一日の労働に対してのご褒美のように感じられた。

遅くまでいろいろな話をした。外に出ると電気がどこにも見当たらない漆黒の闇だ。動物の鳴く声や草木が風にそよぐ音以外は何もしない。まるでこの家族だけ取り残されたような孤独感。そんな環境で、家の中の暖かさがすごく幸せなものに感じられる。お父さんがいて、お母さんがいて、子供たちがいて、美味しい食べ物がすぐそばにあって。毎日、繰り返される生活のための家事や労働。「毎日しんどくないのか」と聞いてみた私に、「明日が来るのが楽しみ」というお母さん。便利な暮らしを経験したことのない彼女は、当たり前のこととして、幸せなこととしてここで暮らしている。幸せとは、それを感じる心なのだとしみじみ思った。少なくとも、ケニアの農村にいるこの家族は幸せだと実感した。

次の朝、早く起きて紅茶葉を摘むのを手伝った。大きな籠を背中に背負って、狭い茶畑に入って摘んでいく。背中にずっしり重みを感じつつ、早朝に摘んで工場行きのトラックに載せないといけないということで急いで摘んでいく。そして、同じ一日がまた始まっていく。幸せを知る豊かな生活がまた始まっていく。

任 書劍 プロフィール

1975年▶出生 1998年▶中国南京大学卒業 1998年▶来日 1998年～2000年▶奈良日本語学校 2000年4月▶日本映画学校入学 2001年▶ドキュメンタリー映画「かれらの家」企画・監督 2002年▶ドキュメンタリー映画「蒲公英的歲月」企画・監督／日本映画学校今村昌平賞受賞 2003年3月▶日本映画学校卒業 2003年4月▶日本大学芸術研究科映像芸術専攻課程進学 2004年▶ドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」企画・制作／湯川賞受賞 2005年4月▶日本大学芸術学研科映像芸術専攻後期博士課程へ 現在：劇映画「私の叙情的な時代」製作中

* 日本不法滞在の兄弟たちの生活を追った「蒲公英的歲月」は高い評価を受け、選ばれて山形国際ドキュメンタリー映画祭2003及びあきた十文字映画祭2003に出品。「北朝鮮の夏休み」もあきた十文字映画祭に出品されている。

2004年の夏休み、私は日本から中国に帰り、それから延辺地区を経由して北朝鮮に入った。私と同年代の中国人にとって、北朝鮮に対する感情は少し複雑とも言える。子供の頃に受けた教育の中で、北朝鮮はずっと中国の友好的な隣邦として登場し、また私達にとって北朝鮮の人の印象は善良で、まじめで、歌も踊りも上手である。その上、朝鮮半島の戦争に関しては、中国の教科書もずっと米国が朝鮮半島を占領しようとしたから起きたと言われている。このような話は前世紀の90年代まで続いていた。

1998年、私は日本に来て、日本の社会の反応は北朝鮮はざる賢い強引な国家だと言われていることを初めて知って驚いた。ニュースのほとんどが経済危機と、ミサイル発射事件、核開発と拉致事件に関連している。私はこのような中国と日本の反応の違いを当初とても受け入れることができなかった。さらにブッシュ大統領の、「北朝鮮は悪の枢軸」という発言で人々はいっそう北朝鮮に対して悪印象を深めた。私の周りの殆どの日本人友人は北朝鮮に対して悪感情を抱いている。私が北朝鮮に向かう行動はとても危険であり、できるだけ控えたほうが良いと言う人さえもいた。

中国東北地方の延吉は北朝鮮との深い関係から、北朝鮮の旅行業務を取り扱っている業者がある。私はそこから北朝鮮に入った。元々はピョンヤンに向かう計画だったが、ちょうど北朝鮮の建国記念日に当たったため、外国人観光客の入国が制限されていた。その結果、私は北朝鮮の会寧、羅先、清津という自然環境はきれいだが発展は遅れている街へと向かった。もしピョンヤンを芝居に満ちた街だとすると、この三つの街のほうが比較的庶民的な北朝鮮を表しているのではないかと思われる。私は以前に数人の北朝鮮の一般人を取材する機会があったが、彼らは素朴で真面目で、世界のたくさんの民族と同じ様にいろいろな夢と、優雅な生活に対する憧れを抱いている。しかし彼らが受けた教育は、彼らにきわめて神格化した国家の統治者を崇拜させることである。ここで私は中国の文化大革命を思い出す。

中国人には北朝鮮を批判する資格はない。何故ならば30年前の中国は同じことをやったからだ。中国の歴史は

私達に教えてくれている、人間性が圧迫され、不自由な社会はいつか失敗に終わる。けれども失敗の原因は外部からの圧力ではない、最も重要な力は内側からの力である。

このドキュメンタリーを通して、私は日本や海外の人々にもっと違う角度から北朝鮮を見てもらい、客観的にこの国家の真実の顔を知ってもらえることを望んでいる。同時にもっと多くの人々に彼らを尊重し理解して欲しいと望んでいる。経済制裁と武力に苦しむのは北朝鮮当局者ではなく普通の朝鮮人であることを知ってほしい。彼らが求めているのは手助けであって敵対ではない。アジアの歴史が生み出した多大な憎しみが、われわれの世代にまでこんなに重すぎる重荷を背負わせている。私達の世代から共に新しい紀元を開拓することを望んでいる。

「北朝鮮の夏休み」は

2006年4月8日(土) 14:00～15:30

於：まちだ中央公民館・視聴覚室にて上映予定 参加無料

nián huā wēixiào
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

春愁や弥勒菩薩の指の先

chūnlái chóu sī cháng
春来愁思长

míle púsà huò dá xiāng
弥勒菩萨豁达相

zhǐjiān fēi xúncháng
指尖非寻常

人間春愁、而神仙不春愁。阳春的柳絮粉扬，莺歌燕舞。都会勾起人间的春愁思，而弥勒菩萨则不同。他那笑看人间的宽宏大量，是不随四季的推移而改变的。但是，作者却偏偏捉捕到了菩萨的指指尖变化？——是春愁粘上去了，还是以指尖的微抵卸春愁的侵蚀，令人嚼味。

♪♪ 歌って楽しく友好の輪をひろげよう! ♪♪

笑顔が美しくなる「中国語で歌おう! 会」 まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中!

2002年4月より、麻生市民館の視聴覚室で趙鳳英先生の指導を頂いていた「中国語で歌おう!」会のサークルが、2006年4月よりまちだ公民館に会場を移動します。

これまで、中国や日本、その他世界の愛唱歌を中国語で歌って40曲近くなります。中国語の発音は、なかなか日本人では出せないなったり、区別がつかなくなったりですが、歌唱と併せて楽しみながら指導いただいています。

是非ご一緒に歌いましょう!!お待ちしております。



4月の練習日: 4月14日(金) 19:00~20:30

於: まちだ中央公民館・第一音楽室

練習曲: 「花」(喜納昌吉作詞・作曲)

*録音機をお持ち下さい。

▶ **会場:** まちだ中央公民館6F・音楽室1 (下記地図をご覧ください)
(横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分 町田東急裏109ファッションビル6F)

▶ **講座日:** 原則として、毎月第2金曜日、又は第3金曜日
*会場の抽選にもれた月は講座はありません。1講座で1曲練習の予定です。

▶ **時間:** 19:00~20:30 会費: 1,500円(一回ごと) 体験参加: 1,200円(初回のみ)
どなたでも自由に参加できます。但し、不定期の開催になることもありますので、会員登録がされていない方は、連絡のため原則として‘わんりい’おたより会員に登録をお願いしています。
*おたより会員年会費: 1500円 毎年、4月納入 ‘わんりい’の活動の全てに参加できます。



‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い
年会費: 1500円 入会金なし
郵便局振替口座: 0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’は、「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会です。日本に外国の方々が増え始めた1992年より、主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

毎年、4月は新年度のおたより会費納入の月です。新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わんりい’HPをご覧ください。

‘わんりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わんりい’の全ての活動に参加できます。

問合せ: ‘わんりい’TEL/FAX: 042-734-5100

‘わんりい’掲載原稿募集 ‘わんりい’は、皆で作る会報です。原稿とイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思っておりますが、ページ数の都合で遅れることもあります。紙面の関係で、若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。

馬頭琴演奏者、チ・ブルグッドさんのお話と演奏「草原のチェロ・馬頭琴ってどんな楽器?どんな音色?」

2006年2月19日(日) 於: まちだ中央公民館

J: COMチャンネル(11チャンネル)「TVフォーラムかながわ」で放映されます。

放映期間: 4月24日(月)~30日(日)月・金・日曜日 15:00~16:00 / 火・木曜日 21:00~22:00

ren shujian

任書剣ドキュメンタリー映画上映

「**北朝鮮の夏休み**」

2004年制作 75分 監督：任書剣

2004年夏、僕は大学の夏休みを利用して北朝鮮に行った。日本では拉致問題や核の開発などで悪い印象を深めている北朝鮮だが、北朝鮮の人々の実際の姿とさまざまな夢に触れたいと思った…。(‘わんりい’14p及びチラシ参照)

2006年4月8日(土) 14:00 ~ 15:00

於：**まちだ中央公民館・視聴覚室**

JR横浜線町田駅ルミネ口下車徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

参加：**無料** 先着：36名(申込者優先)

主催：日中文化交流市民サークル‘わんりい’

申込み&問合せ：TEL/FAX 042-734-5100‘わんりい’

E-mail wanli@m2.ocv.ne.jp

スケッチブックと画材を携えて世界各地を旅する

一級建築士・^{わたなべよしたか}渡邊義孝さんの

旅、そして出会った人々

20世紀末、ユーゴ紛争を経て独立した東欧の国、ボスニア・ヘルツェゴビナとクロアチアを中心とした楽しいお話を、スケッチや写真を見せていただきながら、伺ってみたいと思います。(チラシ参照)

2006年4月16日(日) 14:00 ~ 15:30

於：**まちだ中央公民館・視聴覚室**

JR横浜線町田駅ルミネ口下車徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

参加**無料** 先着：36名(申込者優先)

主催：日中文化交流市民サークル‘わんりい’

申込み&問合せ：TEL/FAX 042-734-5100‘わんりい’

E-mail wanli@m2.ocv.ne.jp

あさおサークル祭り2006 5月20日(土)・21日(日) 於：**麻生市民館** (小田急線新百合ヶ丘駅北口3分)
‘わんりい’の催し予定(全て参加無料 問合せ：‘わんりい’事務局 TEL/FAX：042-734-5100)

【**視聴覚室**】*****

▶ 5月20日(土) 10:30 ~ 11:30

ドキュメンタリー映画「**北朝鮮の夏休み**」(2004年)(2005年日本大学大学院湯川制賞)
中国人留学生のレンズが語る、北朝鮮の人々の日々の暮らしと夢

▶ 5月21日(日) 10:00 ~ 12:00 中国川劇ビデオ鑑賞「**白蛇伝**」*川劇：中国四川省の地方劇
摩訶(まか)不思議！一瞬に変わる変面の妙技!! 天界を追放された白蛇と、若者の波乱に満ちた愛の行方や如何？

▶ 5月21日(日) 13:30 ~ 15:00 「**夜来香**」を中国語で歌おう！ 指導：趙鳳英さん

【**大会議室**】*****

▶ 5月20日(土) 14:00 ~ 14:30 語りと馬頭琴合奏による「**スーホの白い馬**」

語り：桑原紀子 演奏：万馬馬頭琴教室メンバー

14:40 ~ 15:15 万馬馬頭琴アンサンブルによる、迫力の馬頭琴合奏！

第二回日本中墨会展 (入場無料)

中国人画家・満柏さんが指導されている
水墨画教室連合の展覧会

参加者60名以上、中国式水墨画の作品140点以上が展示されます。

▶ 於：**相模原市民ギャラリー** (JR相模原駅ビル4階)

2006年5月26日(金) ~ 30日(火)

10:00 ~ 17:30 ●初日14:00 ~ 18:00

●最終日10:00 ~ 15:00

▶ 5月26日14:00より**水墨画実演**

主催：日本中墨会 会長：満 柏

事務局：〒229-1123 相模原市上溝1252-15

電話：042-757-9518

e-mail：manboinsea@yahoo.co.jp

ご予約下さい！

「夏を呼ぶ南洋の味・インドネシア料理」講座

▶ 2006年6月4日(日) 11:00 ~ 14:00
於：**麻生市民館料理室**

参加費：一般 2500円 (会員：2300円)

定員：30名(お申込み下さい)

講師：ROSALITA(ロサリタ)

バンバンル ディアント和光大学助教授夫人

▶ **予定メニュー**

1) ナシ グレン (食欲をそそる風味のチャーハン)

2) サテイ アヤム (鶏肉のインドネシア風スープ)

3) ガドガド (ピーナッツ味のサラダ)

4) レンベル (インドネシア風デザート)

問合せ：‘わんりい’事務局 TEL/FAX 042-734-5100